

伝える心、伝わる心

東京医療センター
看護部長
長田 恵子

桜について、花の時期は過ぎてしまいましたが立春をむかえるやいなや開花予想に始まって開花宣言、桜前線と毎日天気予報とともに報じられます。日本人は桜が好きなのだと思人事に思いながらも、桜にまつわるエピソードには思わず聞き入っている自分がいます。その中で、道路整備にあたって桜並木が伐採されるのを致し方ないと思うものの、せめて今年のこのつぼみたちが花開かすまで待ってやってほしいと歌を詠み伝えたことが、多くの人の心を動かして工事そのものが見直されたとテレビで報道されていました。また、東日本大震災の津波災害の教訓として後世に伝えていくために、桜の木を津波の跡に沿って植樹したということも報じられていました。この両エピソードは、花を待ちそして咲く度に、青々と茂る木々の葉に、紅葉の美しさに心の温かさや大切な思いも一緒に開くのだろうと思います。

昨年のネパール大地震で派遣された看護師の活動報告に、これもまた、伝える方法を選択するにあたって伝える相手を思いやる心に感心した事があります。被災地の診療所には多くの傷病者が次から次へと運びこまれ、対応する現地の医療者数も器材量も十分ではありません。支援に入り活動していたその看護師は、入院患者のベッドネームが紙製でペンによる記載であり、セロテープで一か所とめられているだけなので、何かで濡れて消えかかっていたり、破れていたりはがれかかっていたりしているため、患者確認が危うくなるなど感じたそうです。持参した資器材で新しくベッドネームを作り変えてしまえば簡単なのかもしれません。ですが、現地の方々に

してみればぎりぎり頑張ってきたやむを得ない状況です。そこで、診療所の責任者に「がんばろう！ネパール、JAPAN」（ネパール語記載）というシールをあちらこちらに貼って応援の気持ちを伝えたいことの詳細を得、さりげなくベッドネームの補修をしたそうです。

また、診療所内には手洗い啓蒙のポスターが貼られていました。ただ手洗い場とは違う場所でしたので注意を惹く効果には残念と感じたそうです。そこで現地の子供たち（被災地では子供たちもいろいろと手伝ってくれたそうです）に気分転換も考えて、絵を描いて遊ぼう！とはたらきかけ、「手洗いのポスターをまねて描かれた絵」を手洗い場に貼り、「診療所の皆が見ながら洗える、仕事にとっても役立つことです」と子供たちに感謝したそうです。この支援活動報告の中に被災地の人々の生き方や文化、今までの努力を尊重した行動をとるというポリシーを強く感じましたし、きっと日々の活動の中でも発揮されているのだろうと思いました。

どこの施設も新年度には新採用者や異動の赴任者を迎え、新たに組織づくりが始まりました。人と人をつなげるためにどのような伝え方をしていくのか、桜と災害活動のエピソードに学ぶものがあります。相手を尊重し対等な立場で自己の感情ではなく大切なことを率直に伝える、「アサーティブ」といわれます。職場で互いの立場を思いやり、アサーティブなコミュニケーションで職員各自が働きやすい職場環境を作る、そのベースがあってチーム医療の質を高めることができるのだと思います。